

内容紹介

福島県富岡町は東京電力の福島第1原発から20キロ圏内にあり、町民の3割弱は県外の46都道府県に散らばる。町には臨時災害放送局「おだがいさまFM」（放送地は郡山市内の仮設住宅）があり、住民に貴重な情報を流してきたが、震災から時間がたつ中で「いつまでも災害FMではやっていけない」と指摘されたこともある。だが、災害FMなら一部免除される音楽の著作権料なども通常局だとかかる。このFM局の3年余を見つめた。

初出

朝日新聞 二〇一四年十二月十二日～十二月三十一日

※本文内の画像は、W E B用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

目 次

第1章	避難者癒やす富岡弁
第2章	ふつうの町民が主役
第3章	そうだ、ラジオだ！
第4章	花開いたミニFM
第5章	みんな笑いたかった
第6章	熱意に役所が折れた
第7章	次々現れた救世主
第8章	3・11 再出発の日
第9章	おらもがんばっぺえ
第10章	特番で3年ぶり再会
第11章	それでも流す町民歌
第12章	新町長の考え変えた
第13章	母からもらった声で
第14章	ありがとう、伝えたい
第15章	故郷の明日みつめて
第16章	励まされ、語り継ぐ
第17章	笑い、原点から発信
第18章	帰れぬ町の除夜の鐘
第19章	ラジオの役目は続く

第1章 避難者癒やす富岡弁

沖縄・伊良部島。

太陽がまぶしい。2014年11月5日、最高気温は26・7度。ソーキそばを食べ終えた林貴代子（はやしきよこ）（66）は、タブレット端末のボタンを押した。

「76・9メガヘルツでお聴きの郡山のみなさま。全国各地の避難先でお聴きのみなさま。ごきげんよう」

なつかしい声が聞こえる。

「今朝も寒かったです～郡山。霜が降ったとか。フロントガラスが白くなるのも時間の問題ですね」

福島県富岡町の臨時災害放送局「おだがいさまFM」。林は生放送に耳を傾け、思いをはせる。

パーソナリティーは吉田恵子（よしだけいこ）。林より、ひと回り以上若い。「恵子ちゃん」と呼ぶ顔なじみだ。

「ラジオで明るい声を聴くたび、彼女の笑顔を思い出すの」

富岡町は東京電力福島第一原発の20キロ圏内にある。第二原発が立つ。事故後、町民1万6千人は国の指示で避難した。いまでも3割弱が福島県外の46都道府県に散らばっている。

林も、そんな一人だ。

町立保育所の職員だった17年前、老後に住もうかと考え、夫と伊良部島に家を建てた。東電の下請け仕事を請け負っていた夫は4年前、66歳でがんで亡くなった。いま、耳が不自由な長男（43）夫婦と暮らす。

吉田との出会いは20年前。

長男が講師に招かれた手話教室の担当者が吉田だった。富岡町の社会福祉協議会に勤める職員だ。週1回は顔を合わせ、町でばったり会えば世間話に花を咲かせた。

沖縄から、はるか2千キロ。富岡の家は帰還困難区域にあり、林が戻れるあてはない。結婚後40年過ごした町は「青春そのもの」だった。

身の振り方は決まらない。「でも、富岡とはつながっていたい」

そんな思いを支えてくれるもの。それが、おだがいさまFMだ。

東北各地にできた臨時災害FMで唯一、ふるさとの土地とは違う避難先の福島県郡山市で放送を続ける。

パーソナリティーは吉田ら16人。富岡町は避難者にタブレットを無償で配った。全国どこでも、過去2週間分の放送までネットで聴ける。

14年10月29日の放送は、復興住宅の2次募集が始まったと伝えていた。

「知人がそばにいと心強い。おだがい助け合えるといいですね」

吉田の富岡弁に、林がほほ笑んだ。

第2章 ふつうの町民が主役

原発事故から3年9カ月が過ぎても全町避難が続く福島県富岡町。

町から西へ60キロ。町の臨時災害放送局「おだがいさまFM」は、郡山市の仮設住宅の真ん中にある。

2014年9月6日、土曜日。

パーソナリティーの吉田恵子が6畳のスタジオに入り、マイクの前に座った。背後には、全国から寄付で集まった音楽CDが50音順に並ぶ。

本番10秒前。吉田がマイクの高さを合わせ、ヘッドホンをつけた。

この日のゲストは震災前、吉田の近所に住んでいた顔なじみの平山美弘（ひらやまよしひろ）（５１）。日中だけ出入りできる富岡町内の居住制限区域で１４年５月、自動車の整備工場を再開させた。

吉田「富岡の自宅は？」

平山「中央の下町です」

吉田「わたし、中町」

平山「下町だから、うちはダウNTOWNだと言っていました（笑）」

吉田も富岡の人間だ。土曜の番組には富岡の出身者や支援者をゲストに招き、近況を語ってもらう。

避難生活を送る小学生、金婚式を迎えた夫婦、戦争体験を語る８０代男性……。１００人以上が出演した。

吉田は自分の体験を交えつつ、なるべく具体的な地名や名前をゲストから聞き出すよう心がける。その響きをなつかしむリスナーのために。

「なまってっから」「目立ちたくねえ」。そう言って、出演を断られることもある。

そんなときは「かつこよくなくていいの。ふつうの富岡の人を主役にしたいから」と背中を押す。

吉田は町の社会福祉協議会に勤める。この２７年、ボランティアの仲介役やケアマネジャーとして働き、町民の暮らしをサポートしてきた。

それにしても、震災前はラジオを切り盛りするなんて思ってもみなかった。でも、「ミーハーでおしゃべり」。ケアマネとしてお年寄りと向き合ってきた経験が生きている。

避難先で悩むリスナーのお便りを読んだときは、こう語りかけた。

「肩身の狭い思いをしている富岡の方、多いと思う。だけど、泣いて一生を過ごすより、笑っていろんなことに挑戦して、新しい自分を見つけるのもいいと思うんです」

「お互い様」を意味する方言「おだがいさま」。

その言葉には、見返りを求めず相手に寄り添い、支え合う町民の精神が込められている。

そんなラジオの始まりは震災直後。富岡の人たちでごった返す、郡山の避難所だった。

第3章 そうだ、ラジオだ！

「町民が避難している。助けが必要だ。すぐ来てほしい」

2011年3月20日、富岡町社会福祉協議会のケアマネジャー吉田恵子は上司から急ぎの電話を受けた。

富岡町から西60キロの郡山市にあるイベント施設「ビッグパレットふくしま」が、町民を中心に約2500人の避難者であふれているという。

原発事故で町民に避難指示が出たのは震災翌日の3月12日。吉田は富岡の自宅から老いた両親を連れ出し、妹がいる横浜市に身を寄せていたが、急きょ郡山へ車を走らせた。

ケアマネの研修で何度も訪れたことのある大きなホール会場。そこに収まりきらない避難者が廊下やトイレの前まで埋め尽くしていた。

「何をしたらいいのか……」

まずはケアマネで担当していたお年寄りの安否を確認したり、困りごとの相談に乗ったり。手探りのまま、寝泊まりしながら働き続けた。

震災ひと月後の4月11日、混乱する避難所の運営を任された福島県職員の天野和彦（あまのかずひこ）（55）がやってきた。

放射能から逃れ、着の身着のまま逃げてきた避難者たち。家族が散りぢりになり、話し相手をなくしたお年寄り。いつ家に帰れるとも知れず、無気力な空気が漂っていた。

天野は思案した。

「崩壊したコミュニティーをつなぎ直すには、どうすればいいのか」

5月1日、全国から駆け付けたボランティアと避難者をつなぐ「おだがいさまセンター」を発足させる。

避難者からは身近な支援情報を求める声が多く、A4判の情報誌「みでやっぺ」も2千部発行した。

吉田が広報担当を引き受けた。避難者一人ひとりに「お元気ですか」と声をかけ、配って回った。

そのとき、老眼鏡も持たずに逃げてきたお年寄りが、小さな文字を読めずにいるのに気づいた。

「館内放送じゃなく、気軽に聞ける声の情報があつたら……」

翌5月2日、天野は、知り合いだったふくしまFMの藤原一裕（ふじわらかずひろ）（37）と避難所内でばったり出会う。

藤原はパーソナリティを務める自分の番組で、おだがいさまセンターの発足を紹介したばかりだった。

「段ボール運びでも、何でも手伝わせてください」と申し出た。

天野は思いつく。

「お前がやれることは、もっとあるはず……そうだ、ラジオだ！」

ありがたいことに、支援物資のポケットラジオが目の前に山ほど届いていた。

第4章 花開いたミニFM

2011年5月2日、富岡町の避難者らであふれる郡山市のイベント施設「ビッグバレットふくしま」。

ふくしまFMのパーソナリティー藤原一裕（37）は、現場を仕切る福島県職員の天野和彦（55）から避難者向けラジオの開局を託された。急いで局へ戻り、同僚に声をかけた。

ディレクターの古賀徹（こがとおる）（42）と技術の星辰行（ほしたつゆき）（38）が、二つ返事で手伝ってくれることになった。仕事の後、ボランティアで駆けつけた。

さっそく安いアンテナや送信機、ミキサーをインターネットで探した。ヘッドホンやマイクケーブルなど足りない機材は星が調達した。音楽のCDはみんなで持ち寄った。

FMの周波数は87・9メガヘルツ。周辺の放送局と重ならないよう選んだ。「花開く」の語呂もよかった。

T字アンテナで電波の強さを測り、館内だけに届くよう調整した。

藤原と星がラジオを手に入信状態を確かめていると、避難者が「ここ、何マイクロシーベルト？」。放射線量の測定と勘違いしたらしい。

放送時間は平日の夜7時から9時までの2時間と決めた。

「ラジオなんて、素人にできるわけねえべ」

天野から計画を知らされた富岡町社会福祉協議会の吉田恵子は、正直そう思った。それでも社協の上司を説得し、機材に必要な26万円を寄付金からまかなうことができた。

特設スタジオが施設1階の入り口近くにできた。避難者用の間仕切りの残りで作った。支援に来た京都府職員が黄色とオレンジ、緑のペンで段ボールの看板を作ってくれた。

おだがいさまFMの誕生だ。

5月27日、ミニFMの放送はディレクター古賀の第一声で始まった。

「花開く87・9メガヘルツで開局しました。一緒にしゃべって、楽しい番組をつくっていきましょう」

温かい語りに耳を傾ける避難者。

「ラジオは人をつなぐメディア。つらいこと、いやなこと、みんなで一緒に分かち合いましょう」

続いて、富岡町や支援団体からの情報を読み上げた。

「あす、仮設住宅地特集号を配布します。病院、スーパーなどの生活情報を紹介しています」

「震災対応なんでも相談会があります。『通帳もカードも置いてきた』『家はどうなる』『借金は』など、なんでも聞いてください」

伝えるべき情報は山ほどあった。しかし避難者が求めていたのは、それだけではなかった。

第5章 みんな笑いたかった

2011年5月27日の開局から数日後。おだがいさまFMの公開生放送中、富岡町民ら約1千人が避難する郡山市のイベント施設ビッグパレットふくしまが笑い声で揺れた。

「避難所の中にある女性専用スペースに入った輩（やから）がいるらしい。そういうおっさん、いるんだよね～」

ふくしまFMのパーソナリティー藤原一裕（37）が、最近耳にした話を冗談まじりに放送で紹介した。

「ごめん、オレだよ」

施設1階のスタジオ前にいた避難者の60代男性が手を挙げた。

藤原がすかさず突っ込む。

「おとうさん、入っちゃだめだよ～」

3階まで避難者でひしめく施設が、どつとわく。スタジオ隣の臨時交番にいた警察官も、口に手をあてて笑いをこらえている。

その様子を見ていた富岡町社会福祉協議会の吉田恵子は思った。

「ああ、みんな笑いたかったんだ。まわりに気をつかいながら声を潜めて我慢していたけれど、笑ってもいい、そのきっかけが欲しかったんだ」

放送を重ねるごとに、スタジオ前には人の輪が広がった。避難者はラジオ片手に自分でパイプいすを持ってきて、楽しそうに聴いた。

パーソナリティーが富岡の地名を言い間違えると、「それ、違うど～」と町民がツツコミを入れた。富岡町長だった遠藤勝也（えんどうかつや）（故人）が出演したときには、「何年後に町へ戻れるのか」と厳しい質問が飛んだ。

裏方を務めていた吉田。スタッフから「富岡町の話をして」と頼まれ、6月15日に初出演して話した。

「まさか自分がしゃべる日が来るとは思っていませんでした」

「私みたいな者でもしゃべってるんだから、だれでもしゃべれる。いろんな人に参加してもらえれば」

日がたつにつれ、避難者は一人また一人と、仮設住宅や借り上げ住宅へ移っていった。それでも、放送が流れる時間になると、ビッグバレットに戻ってくる人もいた。

吉田が情報誌を配りに仮設住宅を訪ねると、「ラジオ、聞こえねえぞ」と言われた。「リクエスト曲がかからない」という声もあった。

ラジオが人びとをつなぎ始めた。

手応えを感じ始めた矢先の8月18日、福島県がビッグバレットの避難所を月末で閉鎖すると発表した。

いつか、この日が来るとは思っていた。でも、あと2週間もない。ああ、どうしよう――。

第6章 熱意に役所が折れた

原発事故5カ月後の2011年8月末。郡山市のイベント施設ビッグパレットの避難所が閉鎖された。おだがいさまFMも放送を終えた。

身を寄せていた富岡町民の多くは仮設住宅や借り上げ住宅へ移っていった。しかし、ラジオが聴けなくなるのを惜しむ声が相次ぐ。

「何とか続けられないものか」

富岡町社会福祉協議会の吉田恵子は、継続に向けて動こうと決めた。

電波の管理は総務省だ。電話すると、地域放送推進室の課長補佐だった遠藤稔（えんどうみのる）（53）につながった。

「避難所のミニFMが終わってしまい、困っています。臨時災害FMというものがあるらしいですけど、私たちにはできないのでしょうか」

約10分。吉田は熱っぽく語った。

黙って聞いていた遠藤がいった。

「お気持ちはわかりました」

東日本大震災後、臨時災害FMと呼ばれる小さなラジオ局が次々できた。自治体が放送免許を取り、東北3県で20以上の市町に広がった。

しかし、どの自治体も被災した地元エリアでの発信だ。役場ごと郡山市へ避難した富岡町のように、避難先で開局した例はない。

とはいえ、原発事故は前例のない事態だ。遠藤は「しゃくし定規に考えてはいけない」と吉田の思いを受け止めた。まずは申請窓口の東北総合通信局に相談するよう伝えた。

すぐ吉田は東北総合通信局に電話をかけ、担当者に事情を説明した。

「はあ、そうですか……」

煮え切らない答えが返ってくる。

「郡山にはコミュニティーFMがあります。そこで富岡の情報を流してもらったらどうでしょうか」

1995年の阪神大震災を機に制度化された臨時災害FM。当時は兵庫県が1カ月半だけ開局した。

吉田が総務省に相談したとき、東日本大震災から5カ月以上たっていた。被災者が求める情報も、安否確認や避難先など緊急性の高いものから支援や復興へと変わっていた。

いつまでが「臨時」なのか。発信エリアをどこまで認めるのか――。

総務省の中でも意見が割れた。

それでも、吉田は食い下がった。

「原発は国策でしたよね。私たちは、その事故のために家を離れなきゃいけなくなっただんです。帰りたくても、帰れないんですよ」

吉田の熱意に役所も折れる。

総務省の遠藤らは協議を重ね、制度上は「問題ない」と判断した。

ところが、開局への壁はまだ残っていた。

第7章 次々現れた救世主

おだがいさまFMを臨時災害FMに認めてもらえないか。

放送免許を取るには、送信機やアンテナの調達から電波の調査まで専門的な知識が必要だった。

開局をめざす富岡町社会福祉協議会の吉田恵子は途方に暮れていた。

そこへ救世主が現れた。

東北各地の臨時災害FMを調査して回っていたNHK放送文化研究所の専任研究員、村上圭子（むらかみけいこ）（45）。

2011年9月8日、おだがいさまFMのうわさを聞き、吉田らがいる郡山市の避難所にやってきた。

事情を聴いた村上は「やりましょうよ。お手伝いしますから」。

震災翌月の4月、宮城県女川町の臨時災害FMの立ち上げに携わった。経験と人脈、ノウハウがある。

おだがいさまFMができれば、全国初の避難先での開局になる。村上は困難と同時に可能性を感じた。

「ラジオでしかつなげない人がある。避難をともにしたメディアは、きっと被災者の励みになる」

開局するには、ほかの放送局と混信しないよう周波数や電波の強さを測って決めなければいけない。それらの申請書類は20ページほどもある。

村上の紹介でNHKの関連会社が測定調査や書類作りを手伝ってくれた。プロ仕様の機材も2年間無償で貸してくれることになった。

富岡町の協力も欠かせない。臨時災害FMの放送免許を取れるのは自治体だからだ。

町役場の総務課課長補佐だった菅野利行（かんのとしゆき）（57）が力になった。

おだがいさまFMがミニFMとして誕生した避難所。町役場もそこに移り、ラジオ放送が町民に親しまれる様子を目の当たりにしていた。

町は月2回、県外に避難した約6千人の町民にも広報誌を発送していた。しかし、「情報が足りない」という不満の声が寄せられていた。

わが町のラジオ。渡りに船だ。

町はすぐ動いた。9月21日、開局の意思を総務省に伝える。全国どこでもネットで聴けるよう、避難者にタブレット端末も配ると決めた。

初期費用は1億円余り。国の補助金もついた。役場内では「税収の見込みもないのに」「将来、重くのしかかるのでは」と懸念の声も出た。

しかし、菅野は確信した。

「避難生活は長引く。離ればなれの町民に寄り添えるのはラジオだ」

申請から2カ月余り、放送免許が12年3月9日に交付された。

開局日は、あの日から1年の節目。吉田はそう決めた。

「こちらは、おだがいさまFMです。JOYZ 2AM—FM。ただいま、試験電波を発信しています」

2012年3月11日の開局が数日後に迫り、富岡町社会福祉協議会の吉田恵子の声が電波に乗った。

放送局はJR郡山駅の北西2・5キロ、富田仮設住宅の真ん中にある。500戸の仮設には富岡町民が多く暮らす。生活支援拠点「おだがいさまセンター」のプレハブ小屋の一角に、6畳のスタジオが入る。

窓ガラス越しに、だれでも生放送の様子が見られる。隣は交流スペース。訪れた人の声をスタジオのマイクがひろってしまうほどの近さだ。

間取りを考えたのは吉田。避難所時代の身近さにこだわった。

「みんなが、わいわい集まる場所から発信したくて」

東日本大震災から、ちょうど1年となる開局当日。朝早くからボランティアが駆けつけ、仮設の住民たちにカレーや豚汁をふるまった。

正午、町長だった遠藤勝也（故人）が開局祝いのあいさつに来た。

午後2時、特別番組が始まった。

被災地支援に駆けつけたロックバンドのオレンジレンジ、アーティストのキャンドル・ジュンらが代わる代わる出演した。

午後2時46分。

ラジオが黙祷（もくとう）を呼びかける。

富岡町の沿岸部では、津波による死者・行方不明者が24人いた。

スタジオ周辺には町民ら約200人が集まっていた。東へ60キロ離れたふるさとの空を見上げ、じっと目を閉じ頭を下げる。吉田もスタジオの外へ出て、その輪に加わった。

夜7時からの生放送には、吉田が出演した。避難所時代、福島県職員としてミニFMを立ち上げた天野和彦（55）と向かい合う。

「懐かしいですね～。7カ月ぶり。お待たせしました。大震災からちょうど1年。本日、無事に開局に至りました」

吉田の明るい声がはずむ。

そして富岡町民へラブコール。

「私から出演依頼があったときは絶対断っちゃいけないよ。富岡の人に、いっぱい出ていただきたい！」

雪が舞う。窓の外を見ると、キャンドルの灯で「ありがとう」の文字が浮かんでいた。

第9章 おらもがんばっぺえ

2012年3月、おだがいさまFMがある郡山市の富田仮設住宅。独り暮らしの宇佐見正俊（うさみまさとし）（80）は、手狭な6畳の居間でラジオをつけた。

「なんだべ、この放送は」

聞き慣れた富岡弁が流れてきた。

小学校の元教師。かつて教科書に「放送は標準語」とあったはず。方言たっぷりの番組に、たまげた。

富岡町の自宅は帰還困難区域の真ん中にある。春は夜（よ）の森（もり）の桜並木で花見を楽しんだ。大きなスパーも近かった。好きな演歌を鼻歌で3番まで歌いながら歩けば着いた。

原発事故直後、東京の次男（44）宅に身を寄せた。居続けるのも悪いからと、旧グランドプリンスホテル赤坂で3カ月を過ごす。福島からの避難者を無償で受け入れていた。

その夏、浅草のビジネスホテルへ移る。地元のラジオ体操に誘われて出かけた。福島出身と言うと、子ども連れの母親に嫌な顔をされた。

テレビをつけると、福島第一原発が立つ双葉町、大熊町の名はよく流れた。富岡の名はめったに出ない。

「福島に帰りたい……」

11年9月、富岡町役場に相談し、郡山市の富田仮設住宅に入った。

500戸に約300世帯の町民が暮らす。表札を掲げていない人が多く、ここにいると分かった知り合いは3人だけ。個人情報だからと、役場は連絡先を教えてくれない。

部屋のエアコンは温度設定の仕方が分からず、もっぱら扇風機を回した。風呂の沸かし方に戸惑い、シャワーばかり浴びた。「知らない人に聞くのは恥ずかしい」。ふさぎ込み、ほとんど外へ出なくなった。

そんなころ、おだがいさまFMが始まった。教え子や同世代の知人が出演し、元気に近況を語った。

「おらも、がんばっぺえ」

生きる力がわいてきた。すぐそばのスタジオに出入りを始める。

演歌のＣＤを買っては持ち込んだ。リクエスト曲を書いた紙切れがスタジオの壁に増えていった。千昌夫の「北国の春」、天童よしみの「春が来た」……。

「４月は入学式。新入生のよろこびの声を聴かせてください」

元教師らしく、番組づくりにそんな注文もつけるようになった。

スタジオ横の交流スペースである体操やダンスの教室にも顔を出す。

パーソナリティーを見かけると、「きょうはよかった」「話し方がちょっと冷たいな」と感想を伝える。

今では、スタッフから「ラジオ評論家」と呼ばれている。

第10章 特番で3年ぶり再会

2013年5月3日。おだがいさまFMのスタジオに、すぐそばの仮設住宅に住む瀬田川（せたがわ）ツヤ子（70）が息を切らして飛び込んできた。

ゴールデンウィーク特番の生放送中。全国各地に避難する富岡町民に電話をつなぎ、近況を尋ねていた。
瀬田川は放送を聴いていて、びっくりした。知人の大野晴香（おおのはるか）（３２）が登場し、埼玉県にいますというのだ。

瀬田川は富岡町の社会福祉協議会で介護ヘルパーをしていた。震災の前年まで社協と一緒に働いていたのが大野だ。原発事故後の混乱で、居場所も連絡先も分からなかった。

ポケットラジオを握りしめる瀬田川。スタジオの窓ガラス越しに、身ぶり手ぶりで合図を送った。

「知り合いなの！」

スタッフから手招きされて中へ。電話の向こうに夢中で話しかけた。

「もしもし、わかりますか？ 瀬田川です。いまラジオ聴いていたら、はるかちゃんだ！ つて。仮設から、すっ飛んで来たのよ～」

「ああ！ こんにちは！」

「私も埼玉に１年いたのよ。近くにいたのね～。でも寂しくて、みんながいる郡山に戻ってきたの」

原発事故後、瀬田川は次女（４７）が住む埼玉へ避難した。図書館に通い、福島の地元紙を数日遅れで読む日々だった。１２年３月、おだがいさまＦＭがある郡山市の富田仮設住宅に、夫（７６）と引っ越してきた。

同じくヘルパーだった大野の母のこと、利用者として送り迎えした祖母のことも、よく知っている。

「元気そうでなによりです。お母さん方も変わりなく？」

「はい。いま、いわきにいます。おばあちゃんも元気です」

「ありがとう。元気な声が聞けただけで、ほんとううれしい」

見事な桜並木で有名な夜（よ）の森（もり）地区。瀬田川の自宅はそこにある。ところが帰還困難区域だ。夫と月に１度、防護服を着て様子を見に行く。

１４年の秋、近所の庭の木が荒れ放題になっていた。原発事故後しばらくは、こまめに手入れされていた。

「ああ、帰るのをあきらめたんだなあ……」

おだがいさまＦＭはインターネット放送で全国どこでも聴ける。

瀬田川の長女（５０）も群馬県で聴いている。富岡から施設ごと避難した知的障害者施設で働いている。

離ればなれの母と娘たち。正月は孫を連れて郡山に集まってくる。ラジオに出演した共通の知人の話題で盛り上がりそうだ。

第11章 それでも流す町民歌

おだがいさまFMには、正午になると必ず流れる歌がある。

くくさくら咲き つつじも咲いて
夜（よ）の森（もり）は 花の季節よ
さわやかに 風さえ薫り
山青く せきれい歌う
ああ 富岡に わがまちに
朝の陽（ひ）が 大きく昇る）

自然豊かなふるさとを誇る富岡町の町民歌。震災前、町でも正午になると防災無線で流れていた。

町の北部、JR夜ノ森駅近くの2・5キロの桜並木は、毎春10万人超の観光客を集めた。駅の土手に咲くツツジは、通過する特急電車が徐行するほど見事だった。

2012年3月のFM開局後。パーソナリティーの吉田恵子に、この歌への批判の声が聞こえてきた。
問題は2番の歌詞の一節だ。

くくあたらしい 科学の技術(わざ)に
ふるさとの 未来をひらくく

原発をたたえる内容に、「原発のせいで未来はなくなった」「もう歌いたくない」との声が上がった。

町民歌は1986年、旧双葉町との合併30周年を記念して作られた。東京電力福島第二原発が町内に完成し、運転が始まって4年後だった。

阿武隈高地と太平洋に挟まれた地域。浜通りの中でも平地や大きな川が少なく、産業は集まらなかった。

それが原発のおかげで町の財政は潤う。原発関連企業で2千人が働き、人口も1万6千人に増えた。農業と出稼ぎが中心だった町はサービス業などが6割を超え、にぎわった。

そんな原発が故郷を壊した。

事故後、町のイベントでは2番だけ歌わないこともあった。歌詞を変えようという話さえ持ち上がった。

しかし、吉田はカットせず流す。

「歌を変えても、現実是不変わらない。これからどう生きるかが問題」

原発事故から1年がたったころ。

町民に集まってもらい、放送で本音を語り合う企画案が浮かんた。

富岡に帰るか、除染は必要か――。そんなテーマだ。

マスコミの取材で将来を問われると「除染がすんだら家に帰りたい」と答える町民が目立っていた。

でも、吉田の耳に入る町民の本音はちがった。「帰れるわけねえべ」「生活を再建できる補償さえあれば除染なんかなくていい」

スタッフの間で議論は白熱した。

「町民の本音こそ、私たちのラジオで伝えるべきだ」「でも、発言した人がたたかれては困る」

結局、意見がまとまらず、企画は実現していない。

第12章 新町長の考え変えた

2013年7月21日、富岡町長選が参院選と同時に投開票された。

おだがいさみFMは全国各地の避難者らに不在者投票を呼びかけ、当選結果は翌朝の番組で伝えた。

当 宮本皓一（みやもとこういち） 3916票

遠藤勝也（えんどうかつや） 3859票

わずか57票差。16年ぶりの選挙戦は、町議から転じた66歳の新顔・宮本が、無投票当選が続いて4期を務めた73歳の現職・遠藤に競り勝った。遠藤は1年後がんで亡くなる。

遅々として進まない原発災害からの復興をめぐり、住民の不満が現職に向けられる。そんな現象が、4月の郡山市長選に続いて起きた。福島県内の首長選でその後相次ぐ「現職落選ドミノ」の始まりだった。

現状をどう変えるのか。宮本は選挙戦で遠藤との違いを強調した。

「おだがいさまセンターは、なくしていい。役割を終えた」

センターはFMの運営母体だ。郡山の避難所時代から町民の支援にあたり、町の資金で活動してきた。

臨時災害FMの放送免許も町が持っている。町の後ろ盾を失えば、放送を続けられなくなる。

FMスタッフに緊張が走った。

宮本がセンター廃止の理由に挙げたのは「公平性」。そのころ、富岡町近くのいわき市で避難生活を送る町民が増え、町役場やセンターもある郡山との「格差」を問題視した。

宮本も、いわきに避難していた。郡山から発信するおだがいさまFMの電波は直接届かず、ほとんど番組を聴いたことがなかった。

宮本の当選後、FMスタッフが動く。まずはラジオに出てもらい、役割を理解してもらおうと。

14年の元日、その宮本が出演した。「町は存亡の危機。国の提言にも振り回されている。でも、ふるさを忘れないでいただきたい」

4月と8月にも出演し、夏の伝統行事「火祭り」の保存も訴えた。

宮本の考えが次第に変わる。

「刻々と変わる町の状況を町民にタイムリーに伝えられる。情報発信の手段は多いほうがいい」

11月24日、新番組「町長の部屋」が始まった。宮本が月1回出演する。初回、この1年を振り返った。

「本格的な除染が始まり、復旧の足音が聞こえる年でした」

「こうちゃんの小部屋」というコーナーもある。趣味のアユ釣りを楽しそうに語り、高校時代の思い出の1曲「コーヒールンバ」も流した。

さっそく町民からは「もっと本音で」との注文もつく。

第13章 母からもらった声で

2013年7月、おだがいさまFMに最年少のパーソナリティーが加わった。富岡町出身の吉野明日香（よしのあすか）（20）だ。

震災が起きたとき、双葉高校1年生だった。母子家庭。富岡の家を離れ、川内村、郡山市、千葉県へ。震災翌月、大学生だった兄（24）が住む山梨県都留市の高校に転校した。

母の輝美（てるみ）は、大熊町にあった福島県職員労組の支部で働いていた。移転先の福島市で仕事がある。毎週末、車で片道5時間かけて山梨に通い、娘とわずかな時間を過ごした。

11年12月、輝美の体調が悪くなる。乳がんの再発だった。脳にも転移し、余命は半年から1年。

「少しでも、そばにいたい」

明日香は12年4月、福島県二本松市の高校へ転校。母は7月、福島市の県立医大付属病院に入院する。

8月10日、死去。46歳だった。

「原発事故さえなければ……」

避難生活の負担が母の死を早めたんじゃないか。そう思うと悔やみきれない。

残された明日香。13年3月に高校を卒業すると、声優科がある郡山の芸術専門学校へ進んだ。

高校時代は放送部員。ラジオのパーソナリティーが夢だった。

「母からもらったこの声で、福島のことを伝えたい」

4月、運命の人と出会う。

専門学校で演劇を教える青木淑子（あおきよしこ）（66）。08年まで富岡高校の校長だった。おだがいさまFMの開局当初から、朗読のコーナーを持つパーソナリティーの一人でもあった。

青木は富岡出身の明日香を気にかけていた。

「ラジオで話してみない？」

「やってみたいです！」

毎週月曜の夜、2人で出演するようになった。明日香は学校での出来事などを感想を交えて話す。青木が質問しながら話を掘り下げる。

パーソナリティーを始めて数週間後。放送後に青木の車で帰る途中、助手席の明日香が打ち明けた。

「同級生に言われたんです。被災者だから、富岡の子だから、ラジオに出させてもらえていいねって」

青木は少し強い口調で返した。

「いいじゃない、言わせておけば。つらい思いをしたぶん、明日香が手にできるすべてを得たって、いいじゃない」

運命を逆手にとるくらい、しぶとく生きなさい。そう伝えたかった。

明日香は、心のトゲがずっと抜けるような気がした。

第14章 ありがとう、伝えたい

2013年9月9日。おだがいさまFMのパーソナリティーになった吉野明日香（20）は、亡き母への思いをつづった詩を放送で読んだ。

46歳の母・輝美が、がんで亡くなってから1年が過ぎていた。

あなたのことを思い出しては
寂しくなって
何も伝えられなかった自分に
後悔していた

母の死後、家族への思いを書き残した「エンディングノート」が見つかった。明日香が幼いころ、離婚したことをずっと気にしていた。

「そんなこと、知らなかった。お母さんがいれば何もいらない。私は全然、平気だったよ」
そう伝えたかった。

原発事故で富岡町の家を追われ、高校を転々とした。ずっと見守り、女手一つで育ててくれた母。悲しみに暮れ、閉じこもる日々が続いた。

でも、高校、芸術専門学校、FM局での新しい出会いが、少しずつ気持ちを前に向かせてくれた。

14年3月8日、明日香は郡山市青少年会館の舞台に立った。

FMと一緒に出演し、専門学校で演劇を教える青木淑子（66）から背中を押され、演劇発表会的一幕で詩を読むことになった。

白いレースの襟がついたピンクのブラウス姿。母が入院前に買ってくれた、お気に入りの一着だ。

スポットライトを浴びる。

観客は約300人。「伝えたい」という思いがこみ上げた。

あなたがつけたこの名前を
誰かが呼んでくれる
あなたがくれたこの声を
誰かが聞いてくれる
あなたがくれたこの掌（てのひら）で
沢山（たくさん）の夢をつかもう

母の車で避難したこと、山梨で転校の手続きをしてくれたときの横顔、新しい制服と一緒に買いに行ったこと、病院で横たわる姿……。

情景が浮かんでは、消えた。

「泣かないで」という青木との約束は守れなかった。

最後は声を詰ませた。

私は私を一生懸命 生きていこう
あなたのような素敵（すてき）な人になろう
「ありがとう」
たった一人のあなたへ

会場が拍手に包まれる。

すすり泣きも聞こえた。

いつもラジオを聴いているという中年の男性が駆け寄る。涙目で「大変だったねえ」と励ました。

明日香は涙をぬぐい、もう大丈夫と笑顔でこたえた。

第15章 故郷の明日みつめて

福島原発事故後、おだがいさまFMのパーソナリティー吉野明日香（20）は高校を転々とし、母の輝美をがん
で亡くした。ラジオで、大勢の観客の前で、その体験を語った。

しかし、芸術専門学校の同級生たちには面と向かって話せずにいた。

放射能の問題があるからだ。とらえ方は人さまさま。意見が違ったら人間関係まで壊れそうで怖い――。

2014年7月19日、演劇キャンプが川内村で開かれた。富岡町の隣村。約90人の参加生徒らのうち、富岡の
出身は明日香ら3人だけ。多くは福島の別の地域や県外から来ていた。

村に2泊して郡山市へ戻る前、全町避難が続く富岡をバスで回った。

山道のトンネルを抜けると、福島第一原発が遠くにうつすら見えた。

町中を走る。屋根瓦や売場が壊れたままの商店街、東京電力のエネルギー館、明日香が生まれた病院……。荒れ
果てた景色が流れていく。

補助席に座る明日香は、ずっとうつむいたまま。同級生らが車窓の風景を見てどう感じ、どんな表情でいるのか。
それを見るのが怖かった。

案内役の町民の女性から「何かしゃべる？」とハンドマイクを向けられた。でも、言葉が出てこない。

JR富岡駅に着いた。

津波でめちゃくちゃに壊れた駅舎。背丈ほどの草が生い茂っている。かつて家々があった駅の海側には、除染で出
た土や草を詰め込んだ黒い袋が山積みになっている。

明日香は配られたマスクを口にはめ、真っ先にバスを降りた。生徒たちは降りるのか。じっと見守った。ほとんどの生徒はマスク姿で降り立った。でも、バスの中に座ったままの後輩も十数人いた。

明日香は、わが町に自身を重ね、自分が否定されたような気がした。

でも、放射能とどう向き合うべきか、自分でもよく分かっていない。

つらいけれど、後輩たちを責めることなんてできない。

7月28日、パーソナリティーとして出演する月曜夜の番組で、合宿での体験を感じたまま報告した。

その2日後、明日香は富岡町の災害復興計画をつくる委員の一人に選ばれた。若い世代の代表として、その意見が町の未来に反映される。

原発事故が起きるまで、町の将来なんて考えたこともなかった。

「お母さんとの思い出が詰まった大切な場所。だから何とかしたい」

いつか、ふるさとに帰れる日は来るのだろうか。まだ見えない明日を見つめ続ける。

第16章 励まされ、語り継ぐ

2014年9月26日、おだがいさまFMがある郡山市の仮設住宅。パーソナリティーの青木淑子（66）が、愛媛県から来た大学生に熱っぽく語った。

「きょう聞いた話を周りの人にも伝えてください。語り部は100年続けていかなきゃ、と思っています。私たちは忘れんぼだから」

青木は13年4月、震災や原発事故の経験を当事者の肉声で伝える「語り人（べ）の会」をつくった。この日は富岡町民の2人が、被災地を回る学生8人に体験や思いを語った。

「避難して家を離れた17日間、飼っていた牛にエサをあげられず、死んだ親牛を裏山に埋めてきたんです。ごめんねえ、なんぼ腹減ったべなあって」（69歳女性）

「郡山で働き始めたけれど、富岡からの避難者だと同僚に打ち明けられない。原発事故でみな苦勞しているのが申し訳なくて」（55歳女性）

青木が会を立ち上げた震災3年目。メディアでは早くも「風化」の言葉が飛び交っていた。「賠償金もらって遊んでる」と言われる人、福島からの避難者と知られないよう郵便物を隠れて取りにいく人もいた。

「当事者が声を上げないと、誤解されたまま忘れ去られてしまう」

語り部を募ると、富岡町民18人が手を挙げた。その1年前には「もう思い出したくない」と言っていた人も参加してくれた。

何を話すか。まず、被災体験を思い出すまま書いてもらった。

夫と仮設住宅で暮らす女性（70）は「当たり前のことが大事」と書いた。避難所の紙コップに慣れたころ、友人の職場で湯飲み茶わんを手にした。「ぬくもりが全然違う」と気づき、涙がこぼれたという。

青木は高校の国語教師だった。その経験を生かし、その人にしか語れない話ができるよう助言を重ねた。

原発事故を招いた東京電力や国への怒りはあるだろう。しかし、感情をぶつけても相手の心には響かない。体験を淡々と語り、聞き手が共感してこそ思いは伝わる――。

実際、人前で話すと言葉に詰まり、時間内に話がまとまらない。

「予定通りになていかない。でも、それでいいの」

福島の県内外や海外からも「話を聞かせて」と依頼が舞い込む。これまでに2千人以上が耳を傾けた。

「報道されない震災の裏側を知った」「原発事故の怖さが生々しく伝わってきた」……

聞き手に励まされ、語り部たちはまたしゃべろうと思う。

福島に縁もゆかりもなかった芸人も、おだがいさまFMを支える。

お笑いコンビ「ぺんぎんナッツ」のいなこうすけ（35）と中村陽介（なかむらようすけ）（32）だ。

2011年5月13日、吉本興業が全国に芸人を派遣する「あなたの街に住みますプロジェクト」で福島県担当として着任した。

郡山市の半壊アパートに2人で転がり込んだ。2Kで家賃は月3万7千円。地元メディアや役所へあいさつに回る。だが、原発事故後の混乱期、仕事はなかなか見つからない。

そんなとき、郡山の避難所ビッグパレットでミニFMを立ち上げた県職員の天野和彦（55）に誘われた。

「とりあえず来てほしい」

見学のつもりで行った5月31日に初出演する。開局5日目だった。

「初めまして、ぺんぎんナッツで～す。半月前、福島に来ました！」

被災者の心情を思うと、派手にやれない。親しみを込め、福島の名物をネタにした。薄皮まんじゅう、ままだおる、赤べこ、白虎隊……。

おそろおそろ、お決まりのギャグをやってみた。「がんばっちゃっても～いいんじゃないの～！」

スタジオ前の避難者たちが笑ってくれた。ホッとした。

それから毎週、自転車を通った。

避難者のおばちゃんから「若い人はどんどん出て行くのに、来てくれてありがとう」と感謝された。

「福島に少しずつ近づいている」

コンビ結成から5年、なかなか芽が出なかった。2人にとって、福島行きは「ラストチャンス」だった。

住みます芸人の企画を知り、2人の出身地の福岡か千葉行きを望んだ。そこへ震災が起き、福島行きに立候補。だれも手を挙げなかった。

先輩芸人から言われた。

「放射能でみんな逃げてる。まだ若いし、やめとけ」

でも、迷いはなかった。

「売れない僕らにできることは、笑いを伝えることです！」

いま、福島県内のテレビやラジオでレギュラー番組4本を持つ。

それでも、おだがいさまFMは2人の「原点」。毎週木曜夜のパーソナリティーとして出演を続ける。

今では思ったことを何でも話せるようになった。少しずつ、みんなが前向きになっていると感じる。

でも、テレビでは放射線量が天気予報のように流れる。街のあちこちにモニタリングポストが立つ。

「福島も僕らも、これで終わっちゃいられません！」

第18章 帰れぬ町の除夜の鐘

ゴォーン……ゴォーン……

2013年の大みそか。おだがいさまFMの特番で、富岡町の除夜の鐘が3年ぶりに鳴り響いた。

「ゆく年くる年みたいにできないですかね」

提案したのは寺好きのスタッフ、久保田彩乃（くぼたあやの）（29）。富岡出身のパーソナリティー吉田恵子が、近所にあった曹洞宗・龍台寺にかけ合った。

13年11月25日昼、2人は鐘の音の収録に向かった。現地は放射線量が高く、日中だけ出入りできる居住制限区域だ。防護服に全身を包む。

曇り空。風が冷たい。真っ赤な紅葉が本堂の白壁に映える。副住職の矢内隆久（やないりゅうきゅう）（54）が出迎えてくれた。

寺は戦国時代の1490（延徳2）年に創建。天下統一を果たす豊臣秀吉に加勢せず、領地替えで今の地に移ってきたと伝えられる。

本堂は雨漏りがひどい。床も抜け落ちそうだ。震災で約300の位牌（いはい）が散らばった。いわき市に避難する矢内が足を運んで片付けている。

鐘は本堂のそばにある。重さ約2トン。30年前に作ったとき、福島県内で最大だったという。

矢内が撞木（しゅもく）をゆらりと揺らし、勢いよく鐘をつく。久保田がそっとマイクを近づける。ひと気のない静かな町に、長く重い余韻が響く。

吉田にとって寺は思い出深い。

自宅から歩いて10分ほど。大みそかは紅白歌合戦が終わるころ、家族みんなで鐘をつきに出かけた。

地元の商店がふるまう年越しそばをすすり、甘酒をいただく。温まると、近くの神社へ初詣。それから海岸に出て、初日の出を拝む。

そんな年末年始の恒例行事も、あの日を境にやれなくなった。

「暮らしに節目がない。なんだか悪いことをしている気がして……」

除夜の鐘の収録時、地域の除染はまだ始まっていなかった。

「高いんだ、この辺は」

副住職の矢内が言った。

鐘つき堂付近を線量計で測ると、放射線量は毎時16マイクロシーベルト。

「正月用に鈴の音を収録しよう」と立ち寄った神社は毎時40マイクロシーベルト。杉の太木から葉が落ち、足元はふかふかになっていた。

吉田は思った。

「除染が手つかずの山の中は、どこもこんな感じなんだろうな」

そのとき、防災無線のアナウンスがスピーカーから流れた。

「一時帰宅のみなさまにお知らせします。午後3時までに町を出てください」

第19章 ラジオの役目は続く

福島県富岡町のおだがいさまFMを切り盛りする吉田恵子。2014年9月12日、仙台市に出向き、東北の臨時災害FMが集まる会議に出席した。

「いつまでも災害FMではやっていけません。続けるなら、コミュニティーFMに移行してください」

呼びかけに、吉田はうつむいた。

災害FMはあくまで「臨時」だ。

だが、移行への壁は高い。放送は24時間。災害FMなら一部免除される音楽の著作権料もかかる。放送を維持するには、スポンサーをつけて年収4、5千万円が必要とされる。

この日の会議は、すでに移行をすませた岩手県の宮古市、大船渡市のFM局などが開いた。15年春の震災4年に向けて共同番組を作るという。

「みんなで集まり、スキルアップをしていこう」「ふるさとをよみがえらせていくのが本当の復興」

前向きな発言が相次ぐ。移行の可否を問われた吉田は顔を曇らせた。

「うちは人手とお金が入り。そもそも町に戻れていない。よそとは事情が全然違うんです」

富岡町は17年度以降の帰還を宣言している。しかし除染やインフラ復旧が遅れ、めどは立たない。

8月の住民意向調査では「戻りたい」11・9%、「戻らない」49・4%、「判断がつかない」30・7%。戻らない、判断がつかないという人でも「町とのつながりを保ちたい」との答えは計52・5%にのぼった。

町民の震災関連死は9月で253人。直接死の10倍以上だ。11月からは復興住宅への入居が始まり、仮設住宅からの移動も本格化している。

また町民はバラバラになる。今こそラジオがつなぐときだ――。

吉田はそう感じている。

「富岡に帰れる日がくるまで、災害は終わりじゃない」

震災から3年8カ月を数える14年11月11日。おだがいさまFMから、子どもたちのにぎやかな声が流れた。

「太陽から電気ができるなんて、びっくりした！」

三春町にある仮の校舎で学ぶ富岡の小学4年生7人。手作りの太陽光パネルを電源に、電子ピアノを弾く授業に大喜びだ。女性リポーターが子どもたちに願いを込める。

「日本のエネルギーを支える力となってくれることを期待します」

新年、おだがいさまFMは臨時災害FMの免許更新を国に求める。

プロメテウスの罠〔59〕 災害放送「おだがいさまFM」の苦しみ

著 者 朝日新聞（佐藤美鈴）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2015年2月12日 WEB新書版発行

2015年12月31日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-602-9

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2015年2月12日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。